の「吉岡三平」という名前と，県立図書館の古い受け入れ印が，「昭和13年6月9日」（1938年）と「昭和24年9月20日」（1949年）の2つ，押されていることである．

「吉岡三平」は，岡山の郷土史・地方史家（1900～1984）のことと思われ，岡山市の市史編纂に携わり岡山市立図書館長も務めた人物でもある（『岡山県歴史人物事典』山陽新聞社より）．いくども作成された岡山市史は，昭和11～13年にも全6巻のものが非売品として刊行されており，同問答の県立図書館での最初の受け入れ印の昭和13年と時期が重なる．市立図書館と関係の深い吉岡の所蔵本の写しである同問答が，県立図書館のみに納入されたとは考えにくい．別の写しかあるいは原本が市立図書館にも納入されたと考えるのが妥当であり，おそらくそれらが市史編纂事業の際に参照された可能性が高い．

実際，ひとつ前の大正9年の『岡山市史』の「第十章　衛生」には，立愿（経直）の名前は登場するものの，医師団体の会長のひとりとしてであり，彼の種痘活動に関する記述はない．それに対して，『岡山市史　第六』（昭和13年）の「第九章衛生」には次のように書かれている．

> 一児に二朱（同廿七年一月十日金六銭に改定）の種痘料を徴して独占的に実施することとなりたるにより，立愿の男立愿は憤然として，細民階級に無料にて種痘すべく，明治六年九月二十八日出願し，三ヶ年後の九年三月十五日許可，以来其の実施に当りしかば，岡山の種痘は，遺漏なく行はれたるものと観るべし．

ここにある「明治六年九月二十八日出願」について，同問答の冒頭にはその出願の際の全文が書かれているのである．「立愿は憤然として」という表現も，同問答で描かれている，県庁のやり方に反発し自らの手で無料の種痘活動（救助種痘・種痘勧善社）を行おうとしている立愿（経直）のふるまいを，ひと言ながらよく表していよう．

話を戻そう．県立図書館とおそらく市立図書館にも納入されたと考えられる同問答の原本あるいは写しはその後どうなったのであろうか．終戦間際の昭和20年6月29日，岡山空襲により岡山市街は壊滅的な打撃を被る．県立図書館は全建物及び蔵書約16万冊を焼失，市立図書館も建物とほとんどの蔵書を失った．筆者は，県立図書館ならびに市立図書館に同問答に関係する他の資料や記録がないか担当者に確認したが，残念ながら存在は確認できなかった（2021年6月時点）．すなわち，同問答以外は全て戦禍で失われ，疎開によって同問答のみが戦禍を免れ「昭和24年9月20日」（1949年）に再び県立図書館に受け入れられた，という訳である．

郷土史・地方史家の吉岡の手元にあり岡山市史の刊行の際にも参照されたであろう同問答が，写しという形ではあるが辛くも戦禍を免れ，長い年月を経て拙論の執筆につながったことは，歴史家として誠に感慨深いものがある．加えて，地道な市町村史の編纂や郷土史・地方史研究とそれらの継承の重要性は，筆者が『医家原田家書籍目録』の書評（「日本医史学雑誌」第66巻第3号掲載）の中でも指摘したところであるが，そのことを再確認した次第である．

（令和3年3月例会）

脳外科医からみたロボトミーの歴史

田中雄一郎

演者は脳腫瘍や脳動脈瘤の開頭手術を専門とするオーソドックスな脳外科医であるが，自身が医師になった（1981年）頃かつて手術で精神病を治そうとした時代があったことを知り驚いたことがある．日本ではその6年前にロボトミーは既に禁じられた治療法になっていた．実は日本は世界で

も最も激しくロボトミーが糾弾され，精神科医主導で精神外科を否定する決議がなされた経緯がある．もちろん自身も脳の一部を破壊して精神病を治療することに賛成しない．ただし脳手術を生業にしている者として，ロボトミーの歴史を正しく知り伝えることは大切な責務と考える．

ロボトミーとは精神病の治療法の一つで，前頭葉白質切截術（狭義）と和訳される．精神外科手術全般（広義）を指すこともある．多くの問題点を孕み人類最悪の手術・呪われた手術と揶揄されることも多い．精神外科は技術的観点から，第一世代（ロボトミーを含む外科的破壊術），第二世代（定位脳手術），そして第三世代（ニューロモジュレーション）に分類される．今回はQ&A形式で世界そして日本のロボトミーの歴史を辿る．内容は①ロボトミー以前の治療法には何があったか，②誰がロボトミーを始めたのか，③ロボトミーと同時代のライバルの治療法とは，④誰がロボトミーを広めたのか，⑤ロボトミーを好んだ国・好まなかった国とは，⑥どのような社会の反応があったか，⑦日本初のロボトミーは誰が行ったか，⑧日本のロボトミストとは誰か，⑨手塚治虫は何を謝罪したのか，⑩精神外科は今どうなっているのか，で構成される．

現代の脳外科医の視点で分析を加える．新聞・映画・漫画がロボトミーをどのように扱ったか，またグーグルが提供するNgram（過去500年間の500万冊に用いられた5000億個の単語の年次別出現頻度）を用いて，これまでにない視点で切り込む．

（令和3年9月例会）

明治以降の精神療法界の流れと，その中での戦後の神奈川人脈の活躍について

――医療人類学的考察を含めて――

澤野　啓一，針原　伸二

明治以降の日本における精神心理療法の開拓者と成ったのは，森田療法の開祖として知られる森田正馬，精神分析派の丸井清泰の両氏である．元来，薬を処方して病を治す薬師（くすし medicus, physician）と，骨接ぎや鍼灸師（もしくは西欧における理髪外科医 Barber Surgeons）以外の担当分野，つまり「広義の心の問題」は，実際には，洋の東西を問わず，伝統的には，宗教者，易者，祈祷師，巫女，魔術師など，もしくは近親者による担当領域であった．西欧近代医学の導入と共に，精神病学も導入された．しかし幾つも設立された精神病院は，広義の統合失調症などの患者を預かる，或は預かって人格を認める所までが主な守備範囲で，神経質・神経衰弱・強迫神経症などの治療を目指す段階には，中々至らなかった．榊保三郎のアイヌのイムバッコの調査に刺激された森田正馬は，帝国大学卒業直後に郷里土佐の犬神憑の調査を開始し，呉秀三や三宅鑛一などのウィーン留学組神経解剖学の影響も受けつつ，自宅開業の中から大正8（1919）年頃に森田療法を編み出した．この森田正馬を文壇知識界に売り出したのは中村古峡であった．丸井清泰は帝大青山内科出身であるが，明治時代の日本医学界の大ボス・青山胤通に新設の東北帝大精神病学教授候補として指名され，米国留学中に図書館でフロイトの本を読み，精神分析法に興味を抱く．帰国後は，戦前の帝大及び官立医大教授としては唯一，フロイト精神分析学を講ずることになる．森田療法が確立し，慈恵医大の教授にも就任した森田正馬は，森田丸井論争を大々的に仕掛ける．中村古峡は後に私立医専に編入して医師資格を獲得し，大規模精神病院を創設して独自の立場を確立する．矢部八重吉に刺激されてフロイト作品を和訳して刊行し始めた大槻憲二は，神戸中学の先輩である丸井清